

# 人民作家がいるところ—趙樹理『“鍛えろ鍛えろ”』から

加藤 三由紀

## はじめに

趙樹理（1906～70年、山西省生まれ）は、20世紀の戦乱と共産党政権の確立が生んだ特別な作家である。作家として歴史に足跡を刻むことになったが、作家である前に農村工作者であり、党员であった。村の基層幹部、農民に向けた作品と、その生き方や人品が語り継がれて、趙樹理という人民作家は今も造形されている。

作家としての趙樹理は、1943年、「やさしいお話（通俗故事）」と銘打った『小二黒結婚』により、戦禍にあった太行山中に突如その名が知れわたった。この袋とじの小冊子の表紙を開けば、朱色で刷られた彭徳懐の推薦文である。47年、周揚が主導し「趙樹理方向」を打ち出し、毛沢東『文芸講話』の実践者として広く宣伝されて、中華人民共和国成立後も、新しい人民文学の重要な地位に据えられた<sup>1)</sup>。だが、50～60年代には文芸官僚の期待に応える作はほとんど書かず、山西省の農村にしばしば滞在し、政策が現実と乖離していることを党内に訴え、59年には反右傾闘争の対象にされた。調整期に入った62年、一旦「名誉回復」したものの、文革で迫害死に至る。

毛沢東が趙樹理を語ることはなかったが、趙樹理を作家として推し出すことになった『文芸講話』について、宇野木洋は、「常に服務すべき対象として眼が向けられている享受者層を、実は一貫して主体性を持ち得ない受け身の存在」とみなすことで成立する論理だと喝破した。続けて宇野木は、作品の思想内容が享受者に「悪い」影響を与えたと判断されれば、その作者の思想が「悪い」として作者の政治的「立場」の問題に還元され、「悪い」作品の発表を許した諸機関の責任問題にまで拡大されかねないと指摘する<sup>2)</sup>。趙樹理が50年代以降たどった道は、宇野木が示す「悪い」が拡大していくプロセスでもあった。

本稿でとりあげる『“鍛えろ鍛えろ”』（原題：“鍛錬鍛錬”）は、58年に発表されて間もなく解釈が分かれて論争の的となり、20世紀末にも趙樹理研究再燃の呼び水になった短編小説である。趙樹理にとっては、『文芸講話』の連鎖の歯車が回りはじめたころの作品である。本稿では、趙樹理が『文芸講話』に与えてきた実作の一つが、まさに宇野木が指摘する『文芸講話』の理論的前提を裏切り、受容者が介入し続ける空間になっていること、そして、17000字の小説が中国社会の多様な時空に繋がっていく様相を示したい。あわせて、趙樹理を熱く語る21世紀の生身の問題の一端に触れられればと思う。

## 0. 趙樹理研究と資料

本題に入る前に、文革後の趙樹理研究と資料を紹介しておきたい。

日本では早くも島田政雄が『嵐に立つ中国文化』（国際出版1948年）で紹介し、竹内好の近代論や洲之内徹の個の観点からの論評<sup>3)</sup>など盛んに論じられ、また、中国の農村社会を知る窓にもなり、当時知られた作品のほとんどが訳された。だが、文革後の萩野脩二の論考や釜屋修『評伝趙樹理 中国の栄光と悲惨』<sup>4)</sup>以降、趙樹理熱は冷めている。

では、中国で読まれているかといえば、文学研究者や地元の文学愛好者でなければ、進んで読んではいないだろう。そもそも、厚い層に向けた小説で半世紀を超えてそのまま読み継がれるものは多くない。一方で趙樹理研究は20世紀末から広がりを見せ、21世紀に入っても衰えず、2010年代にはますます熱くなった。趙樹理が50年代から60年代にかけて、村の現場から農業政策を批判し、作家協会という組織の抑圧と批判に抗したことは、文革後まもなく、書信や会議発言録などによって明らかにされていたのだが、ここから改めて趙樹理研究への関心を広く喚起したのは、陳徒手と陳思和である。

陳徒手『人病あり、天知るや否や』<sup>5)</sup>の「一九五九年冬の趙樹理」<sup>6)</sup>は、中国作家協会等の非公刊資料を含む文書から、反右傾闘争期の趙樹理の苦悩を描き出した。陳思和は、『“鍛えろ鍛えろ”』の解釈を鮮やかに反転させ、『当代中国文学史教程』<sup>7)</sup>に書き込んだ。その後、蔡翔、羅崗、賀桂梅、趙勇など、中国同時代文学研究を牽引する研究者が趙樹理を論じた。趙樹理文学に知的資源を探るこのような学術界での趙樹理研究は、趙樹理生誕110周年の2016年に一つのピークを迎えている。

二次創作や記念行事、ゆかりの地での人民作家趙樹理のイメージ作りなど、趙樹理にまつわる場は層が厚い。研究会参加者の顔ぶれも、村の幹部、起業家、俳優、農民作家と多彩である。北京を除く趙樹理ゆかりの地では、年月をかけて地道に趙樹理を回想する記録を紡ぎ、逸話を収集して、人民作家趙樹理像を編んでいる。「紅色経典」のかけ声が大きくなると、愛国教育基地建設の政策をフルに活用し、趙樹理という旗のもとに文化事業を興して地元文化と経済の発展に取り組むようになった。大都市の太原市でこそ趙樹理故居の影は薄いだが、出生地の沁水県尉遲村にある趙樹理展覽館・陵園・故居、晋城市の趙樹理文学館<sup>8)</sup>、長治市の趙樹理記念館には地元の期待がかけられ、平順県川底村は三里湾村と改称し、史跡保存に加え、樹理苑や三里湾劇場を建造した。『“鍛えろ鍛えろ”』の舞台だと名乗りを上げた長治県壩寨村では、九龍一鳳壁で有名な玉皇観内の一棟を趙樹理資料館に当てている。趙樹理関連の施設は地元研究者の拠点となり、観光業と村の知名度アップに貢献している。それが趙樹理を消費するだけなのか、そこから開けてくる視界があるのかはわからない。というよりも、そこから何が発信されているのか、聴く力が問われていると考えるべきだろう。

こうした文革後の趙樹理研究の基盤となったのが、全集と年譜である。

まず、趙樹理のまとまった作品集として、80年に工人出版社<sup>9)</sup>（49年に趙樹理が初代社長となり、畏友の王春が副社長を務めた）から『趙樹理文集』全四巻が出版された。とりわけ読者に驚きを与えたのは、第四巻に収められた「長治地委××宛ての手紙」や「邵荃麟への手紙」、「公社はいかに農業生産を指導するかについての私見」、「大連『農村題材短編小説創作座談会』での発言」、文革中の自己批判書「歴史をふりかえり、自らを知る」などの書簡や記録で、農村の現場から党の政策を理知的に分析して苦言を呈した文章は、焦りと怒り悲しみに満ちている。なお、文集四巻収録の付録は趙樹理の作とは確定しがたいもので、「欧化と大衆語」<sup>10)</sup>の署名「何化魯」は、地下黨員だった李延年のペンネームであり、当時精神的に不安定だった趙樹理の作ではないことが明らかになっている。

『趙樹理文集』出版後、早期の作が多数発見され、董大中主編『趙樹理全集』全五巻<sup>11)</sup>に編年体でまとめられた。この全集には非常に丁寧な校訂が施されている。董大中らは逸文収集に力を尽く

し、『趙樹理全集』全六巻<sup>12)</sup>、さらに資料を加除してジャンル別にした『趙樹理全集』全五巻<sup>13)</sup>を刊行した。編年体とジャンル別の二種類の全集をもつ作家は多くあるまい。

そして、董大中『趙樹理年譜』、『趙樹理年譜 増訂本』<sup>14)</sup>がある。700頁におよぶ年譜は資料としてのみならず、読み物としても格段に面白く、独特の趙樹理論となっている。この年譜を参照せずに趙樹理を語ることはできない。文革後の趙樹理研究は、以上のような董大中の緻密な仕事に支えられている。

趙樹理研究史には、早期の仕事に黄修己『平坦ならざる道』<sup>15)</sup>、近年のものに朱凌『趙樹理解釈史』<sup>16)</sup>がある。段文昌『趙樹理小説の改編と伝播』<sup>17)</sup>は、『小二黒の結婚』、『登記』、『三里湾』などがリライトされ、連環画や演劇、舞台に仕立てられ、受容されていく動きを丹念に追い、趙樹理文学の特性をよく伝えている。

これら熱く厚い研究が、今なお、人民作家が存在する空間を作り続けている。そこには歴史的な産物に注がれる冷徹な目もあれば、往事の理想を今に繋ぐ期待もあるのだが、いったい何が21世紀の今日になお熱く趙樹理を語らせているのか。趙樹理の何が現代中国の生身の課題に重なるのだろうか。

## 1. 『“鍛えろ鍛えろ”』はどのような小説か

この小説は、山西省の文学雑誌『火花』(1958年8月)、続いて『人民文学』(1958年9月)に掲載され、さらに34頁の小さな冊子<sup>18)</sup>となって広く読まれた。活字になった邦訳はないが、油印に牧田英二訳<sup>19)</sup>がある。

冊子の表紙は、瑠璃瓦の大壁とそこに貼り出された大字報に寄り集まる村人たちを描いた絵だ。冊子のタイトルは『鍛えろ鍛えろ』<sup>20)</sup>で、「まだまだだね、もうちょっと鍛えなくちゃ」という、村の主任(村長)が若手幹部に言う口癖である。

時は1957年晩秋、場は争先農業社である。

村の党員幹部は、早く収穫を終わらせて、畑が凍る前に翌年の増産準備に入りたいのだが、人手が足りない。人手不足解消の鍵となる女たちの力を掘り起こそうにも、労働点数のノルマを下げたり、収穫物の猫ばばを見逃したりしないと、女たちは野良で働かない。人間関係を丸く収めようとする熟練の主任、王聚海では、利にさとく、口達者な女たちに太刀打ちできない。特に手強いのが、「足が痛え」が口癖の五十すぎの婆ちゃんと、「食い足りない」とあだ名がついた李宝珠である。「足が痛え」は若いころ、すねに腫れものを患った。家には息子とその嫁、孫もいる。「足が痛え」が孫の面倒をみて家事を担えば、嫁さんが畑に出られるのだが、「足が痛え」はその昔、自分が姑にこき使われた通りに嫁をかしずかせている。夫が亡くなり息子が幼いうちは痛まなかった足が、息子の嫁をとると痛み始めた。働きたくない時と嫁をこき使う時だけ「足が痛え」となるのだ。李宝珠は、食糧の統一買付が始まってから「食い足りない」が口癖になった。三十路を過ぎて子どもがおらず労働力としては一級品なのに、食糧年間420斤では「食い足りない」から野良に出られないという。ところが実際「食い足りない」なのは夫の方で、いつも夫は薄い粥、彼女の方は夫が野良に出ている間にうどんを食っている。挿絵には、かまどの横のふいごの上に座布団を敷き、井と箸を手にしてあぐらをかき、いかにも横着者の「食い足りない」が描かれている。

小説は瑠璃瓦の大壁に貼り出された戯れ歌から始まる。副主任の青年共産党員楊小四がこの二人を当てこすり大字報にしたのである。それを知った「足が痛え」が文句をつけに村の事務所へ乗りこみ大騒ぎしたので、支部書記は郷の役場へ連れて行けと村人に命じた。みんなもそれに賛成したが、主任の王聚海は「足が痛え」をなだめて家に帰し、今年もノルマを下げて女たちの力を引き出そうと言う。もっとも、主任は女性の立場に立つわけではない。原則がないばかりか、女性を下に見て女性幹部には会議開催の声もかけないものだから、優秀な若手女性幹部に戯れ歌で批判されたこともある。「足が痛え」の騒動のあと、郷から通知がきて支部書記と主任は役場へ出かけることになり、留守の間、農業社の運営は若手共産党員たちに任された。

現場を担うことになった楊小四たちは、畑にこない女たちを罫にかけ強制的に動員し、切羽詰まっていた農作業に目処をつけた。さらに、猫ばばの現場を押さえて、うまみのある仕事しかしない女たちに灸をすえた。最後まで理屈をこねた「足が痛え」も裁判所に送るぞと脅されて小さくなる。こうして、支部書記と村長が帰ってみれば、農作業の難問は解決されていた。そこで、支部書記王鎮海が「若い者もやるな！ふざけたやり方だが、問題を解決したぞ！」と主任に言い、「あなたこそ自分を鍛えなくては」と反省を促したのである。

以上があらましである。

後に争点となる小説の細部を見ておこう。以下は、朝の仕事始めに楊小四が、いつもは畑に来ない女たちに語りかける場面である。この日、彼女たちが来たのは、楊小四が前の日に、明日は全員集合した後、自由に綿拾いだと餌をまいておいたからである。

今日はみなさんそろって来てくれて、よかったです。ここ何日か、毎日隊長さんが綿摘みを呼びかけているのに、なかなか人が集まらず、来ない人にはそれぞれ事情があって、自分が病気だの、子供が病気だの、家事が忙しいだの、あれやこれやで出てこなかったのに、今日は自由に綿拾いとなったとたん、みなさんの事情とやらはどこへやら！はっきりいって、自分だけ得したいのですね。一番摘みで軽くノルマの倍を達成できるときには、みなさんこんな具合に全員集合だ。考えてもみなさい。普段の仕事は他人にやらせて、美味しいところだけ頂こうとは、ずっと畑で働いてきた人たちが、みなさんのせいでどれだけ損しているか。みなさん本当に「拾う」つもりなのかね。一人一日拾っても一斤、銭にして二、三毛で、五日やっても労働点数一日分にもならない、そんな阿呆はいませんよ。正直なところ、綿拾いを買って出る者は綿泥棒だ！今年は去年みたいに、多数が働いて少数の者に盗ませるなんて、許さない！綿木に残った綿は拾わずに、綿木引きしてから畑の端に積んどいて、小学生に放課後毎日拾わせ、拾い終えたら綿木は燻して肥やしにする。今日来た人は一人も帰さない！女性はそれぞれの隊の畑で三番摘みだ。ノルマはいつもと同じ、八斤で一日分の労働点数とする。

女たちは楊小四に反論できず、帰ることも許されず、サボタージュを決めこむわけにいかなくなる。

さて、「足が痛え」と「食い足りない」たち女四人は、集合場所には行かずにそそくさと三番摘み前の畑へ入り、効率よく綿「拾い」をしていたのだが、それを見越して待ち構えていた幹部たちに咎められ、農業社の大会にかけられた。四人のうち三人までは「拾った」のではなく「盗った」のだと白状したが、「足が痛え」は手強い。

最後に「足が痛え」の番になった。議長の楊小四が彼女を最後にまわしたのは、いつも年の功で上手いこと言い逃れるから、まず他の者に事実を並べたてさせて言い逃れの間を与えないようにしたのである。ところがこの婆ちゃん、実にやり手で、筋が通ろうが通るまいが闘志満々だ。被害者面して言うには、「なんて言えればいいのかい。盗ったことにしてもダメなのかい」、「“ことにして”とは何事だ。いったい、盗ったのか、盗らなかったのか、どっちだ」と問う人に、「盗ったとも！副主任が盗らせたんだ！」議長の楊小四が「どの副主任が盗らせたんだね」と言えば、「あんただよ。夕べの大会ではみんなで綿拾いだと言っときながら、一晩明けたら拾ったことにはならないなんて。あんたは口から屁ひるのかね」とやり返すと、小四が答える間もなく、半分以上の大衆がドッと立ち上がった。「おまえ、謀反するのか」、「白状どころか口答えか」……第三隊長の張太和が、「俺から提案だ。白状するチャンスはもうやらない。とっとと裁判所へ送ってしまおう」するとみんな一斉に「賛成」と叫ぶ。

自分を棚に上げて理を通そうとする「足が痛え」に、みんなは裁判所を持ち出して対抗するしかなかったが、彼女の息子がもう一度だけ申し開きのチャンスをと願い出て、裁判所送りはやめになり、くすねた綿花に相当する労働点数を「足が痛え」が自分で稼ぐことを条件に、ことを収めた。

この小説を当時の読者はどう受けとめたのか。趙樹理は何を意図して書いたのか。そして今、いかに読み解くか。

## 2. 当時の読者はどう読んだか

この小説は、大躍進のさなかに読まれることになった。

文学として批評したのは唐弢「人物描写の焦点—趙樹理同志の『鍛えろ鍛えろ』を読む」<sup>21)</sup>で、それぞれの人物の個性が互いの関係性において際立ち、それによってストーリーが展開していく中国古典文学にも似た創作方法こそが、この作の見べき所だと力説した。この唐弢の批評は、『文芸報』が掲載した読者投稿にみられる文学と現実を同一視する思考枠への批判だった。

59年、『文芸報』は「文芸作品はいかに人民内部の矛盾を反映するか」をテーマとする「読者討論会」を立ち上げた。読者討論会といっても、そこには文芸官僚の思惑や編集部の手が入っているだろうが、批評家や研究者ではない同時代の読者の声を伝える数少ない資料である。

討論会の冒頭は、張慶和「小説『鍛えろ鍛えろ』を読む」<sup>22)</sup>である。湖北浠水県農民の肩書きで登場するこの読者の手紙は、それ自体が『鍛えろ鍛えろ』を敷衍した語り物になっており、一種の二次創作である。

休憩の銅鑼を鳴らしたついでに、趙樹理同志が書いた小説『鍛えろ鍛えろ』をみんなに読んで聴かせた。読み終わると、みんなが語り始めた。楊小四がいいなあと言う者もいれば、王聚海という主任は気の毒でもあり、いやなヤツでもあると言う者もいる。若い社員の王建鋼が大声で言うには、「減らず口」と「腰が痛え」も連れてきて聴かせてやろう、「足が痛え」と「食い足りない」はうちの社のこの二人に生き写しだよ。重ねて、「王聚海という主任さんには、原則というものがない。包丁いれた豆腐の切り口みたいに、両面つやつや、両方にちやほや。」こ

こまでくると、第六隊の隊長はいたたまれず、顔を赤らめた。

趙樹理同志のこの小説の人物は、うちの農業社そのものだ。第六隊の隊長は小説のなかの王主任と似たりよったり、隊の労働点数を記録して、食堂の食費も把握して、食材管理から賄いまでする。というの良い幹部のようだが、何一つしっかりやれない。「生産そもそも大問題、なのに隊長畑に来ない。隊長ご立派、全部背負った。さあ大躍進、なのに隊長畑に来ない、何につけても原則はなし」

この手紙の末尾は、隊長が趙樹理の小説を聴いて反省し、独りで全てを背負いこまずにみんなで原則を決めて事を進めるようになり、場当たりの仕事をやり方を改めたとハッピーエンドの報告である。手紙の主の張慶和は、『鍛えろ鍛えろ』を人民内部の矛盾が批判から団結へと解決されていく物語として受けとめた。次に掲載されている二通目も同様で、これが大方の読み方だろう。

論議を巻き起こしたのは、三通目の武養「現実を歪曲した小説—『鍛えろ鍛えろ』読後感」<sup>23)</sup>である。当時はもちろん、半世紀後においても、趙樹理批評のうちで最も真剣に読まれたものの一つである。

武養はここで、反右派闘争以降、現実を反映しない作品が減ったのに、趙樹理のこの小説にはカッときたので、自分は文学家ではないが反対意見を表明すると前置きをして、批判を以下の四点にまとめている。第一に、現実の農村では、後れた農村女性は少数なのに、小説では進歩的な女性はひとりだけ、他は我利我利亡者のろくでなしばかりだ。第二に、農業社の主要な幹部は党の化身であるべきなのに、小説では悪い幹部が大眾をおちょくり強制的に働かせ、果ては白状だの、申し開きだの、裁判所送りだなどと脅しをかける。農業社の人間関係は、幹部と社員ではなく、民警と労働改造犯のようだと読者は思うだろう。第三に、「足が痛え」や「食い足りない」や「丸く収める」主任は上手く書けているが、作家は大眾を脅す悪い幹部に共感して支持をしている。第四に、農業社の大きな問題を解決せず、女たちの自己批判という小さな問題解決で終わらせたのは、整風についての党の指示に背く。

筆者の武養という人物については、全く素性がわからない。

同時期の『文芸報』では同じタイプの『青春の歌』批判もあり、このような批判が出てくる背景には、専門知識は不要で誰でも作家、誰でも文芸批評家という大躍進期の風潮があり、反右派闘争が単純で若い若者の考え方に悪しき影響を与えて、文学世界と現実世界をイコールで結ぶ素人の批評を生んだのだと、黄修己は指摘している<sup>24)</sup>。

次号の『文芸報』は、読者の手紙を八通載せている。「武養の批判文は孤立したものようだ。作家は業界内の人ではなく、この文章が発表されてからの反響では、多くが趙樹理の側に着いた」<sup>25)</sup>というように、八通のうち六通が武養に反駁し、武養のいう現実とは机上の空想であり、趙樹理は現実の生活を小説に反映していると主張した。他の二通は、武養に賛同はしないが、作家趙樹理が楊小四を新しい力として賞讃したと受けとめ、これでは人民内部の矛盾を敵対矛盾として処理することになってしまうと疑念を投げかけるものだ。このうち、自身の体験を綴った安楊（肩書きなし）の手紙<sup>26)</sup>を見ておこう。

むかし軍隊にいたころ、こんな連隊長がいた。以前は問題を解決し仕事ができると賞讃されていた人である。ある時、ある兵士が窃盗を働きそうだったので、班長にわざと目につく場所

に現金をおかせ、盗むチャンスを作っておいて、その場で捕まえ批判大会を開いた。またある時、里心がついた兵士が出張を望んだ。それを知った連隊長が、わざと出張のうまいチャンスを与え、兵士はいくらも行かないうちに、しこまれていた伏兵に捕まった。この二人の兵士は全部毘だつたと知り、強烈な反抗心を起こし、ますます問題がこじれてしまった。この事件によって、連隊長は罪を犯したと処分を受けた。(中略) いつもは来ないのに今日は来た人(物語では女性の半分に当たる)は、心の中でどう思っただろう。作者は書いていないが、この人たちは口では言わずとも心の中で「このガキ、とんでもない腹黒野郎だ」と罵ったにちがいない。

武養の他にも、作者である趙樹理が、楊小四ら若手幹部のやり方をよしとし、これで問題解決したのだと受けとめる読者が多かったようだ。同様に、「足が痛え」は改心しておらず、小説は後れた人物を並べただけで問題は解決されていないと残念がる声もある。読者がこう捉えたのは、実質的な村のトップ、支部書記が作者の代弁者だと思いこんだからだろう。読者の疑義は、実際には、作中の支部書記の判断に向けられたものである。

趙樹理は執筆意図をこう語っている。「王聚海や足が痛えといった人は、こっぴどくやっつけなくてもいいのです。何の法も犯していないのですから。けれども、その思想や観点があやふやでは、仕事に差し支えます。こういった人たちには、事実を並べて見せて、思想の向上をはかるのが一番よいと思います。いまではどこも人民公社になりましたが、こんな思想がまだ残っているので、書けば役に立つと考えました。」<sup>27)</sup> また、60年代初め、黄修己は趙樹理から「農村の基層幹部は、楊小四くらいのレベルです。現実を重んじて、楊小四を現実以上に立派に書くことはしませんでした」という主旨の手紙を受け取ったという<sup>28)</sup>。

発表時の大方の読者の読みは、ほぼ作者の意図をくんでいたと言える。

『文芸報』の討論会は、10月号に載った王西彦の一文で締めくくられた。『文芸報』の企画の意味を、洪子誠は次のように解説している。「編集部は趙樹理を支持し、『生活の実際の通りに個性ある活きた人物を浮き彫りにした』と趙樹理を肯定する王西彦の文章を以て、結論を示す意見とした。『文芸報』のこうした弁護にも似た討論は、趙樹理の揺らぐ地位を守るためであり、また当時の過激な文芸思想を阻止する意味合いもあった。」<sup>29)</sup> 『文芸報』編集部は、武養という人物の一文を掲載し、現実を歪曲したか否か、人民内部の矛盾か敵対矛盾かに討論を集中させ、最終的に武養の論を退けることで趙樹理を擁護し、同時に作家や作品への攻撃を退けようとしたということになる。

次には、擁護を要するほどの状況にあった趙樹理の足取りを細かく見ていこう。

### 3. 執筆前後の趙樹理は何をしていたか

趙樹理文学は農業集団化の歩みと切り離せない。『“鍛えろ鍛えろ”』の争先農業社は、高級農業生産合作社(農業合作社が行政の機能を兼ね、社員は労働に応じた分配を受ける)である。

『“鍛えろ鍛えろ”』に先立つ三年前、趙樹理は長編小説『三里湾』を出版した。『三里湾』互助組から初級農業生産合作社(加入者は労働と提供した土地や生産手段に応じた分配を受ける)へと移行する三里湾村のポートレートだ。これは大躍進期にも、趙樹理の農業集団化への賛歌として受容された。

『三里湾』最大の見所は、ストーリーや人物描写と何の脈絡もなくはめこまれた第十二章から第

十五章にかけて展望される三里湾のパノラマであり、小説の主人公は人物ではなく、三里湾そのものである。作中の三里湾こそ、中国農村の希望の未来だった。そこには、農業合作社への加入が個々の収入を上げ、一人ひとりの自己実現を可能にしていく仕組みが示されており、それは、趙樹理が中国農村の未来図として描いたものだった。ところが、出版後まもなく、55年7月に毛沢東が『農業集団化問題について』で穏健派を「纏足した婦人のようによろよ歩みながら、早すぎると不満を言う」<sup>30)</sup>と叱責したことから、中国の村は互助組から初級農業生産合作社を突き抜け、高級農業生産合作社へと急速に組織されていった。執筆時には未来の青写真だった三里湾は現実に追い越され、未来図としての意義を失ってしまう。しかも、現実に組織された高級農業合作社は農民の収益増とも自己実現ともほど遠いものだった<sup>31)</sup>。

毛沢東の虚像を実体化するために、作家は創作を求められる。

55年11月、趙樹理は高級農業合作社へ移行準備をしている璩寨に滞在し、中国作家協会への手紙で村の混乱した状況を伝えている。「ここも他のモデル地区と同じく、いつも外部から人が来ています。(中略)資料提供に(村の)幹部が忙殺される状況が続き、その状況をいかに克服するかを考えていますが、来たばかりで、何もかも不案内ですし、幹部たちにこれ以上負担をかけたくもないので、資料説明と課題解決のための会議を傍聴するだけにしました。」<sup>32)</sup>

56年8月には、郷里の縁者から聞いた村の危機的状況を、長治地区委員の趙軍に書信で訴え、党中央の基本政策と農民の欲求との矛盾、上級機関の現状把握と農村の実態との乖離、状況に流されるだけの上意下達式の基層幹部、両者の狭間で出路を見いだせずにいる焦燥感を表した<sup>33)</sup>。手紙には、『“鍛えろ鍛えろ”』の舞台設定を思わせる綿花栽培地区の困難な状況が記されている—高級農業合作社へ移行するのに、いくら優越性を説いても現実に「食い足りない」状況では、説得力が無い。食糧の分配は一人一月38斤、綿花栽培地区では三定政策の恩恵もなく、腹がひもじい。指令に弾力がなく、綿花や落花生は作付面積まで決められてしまう。養蚕のノルマもきつい。基本建設が性急すぎ、農作業に支障を来している。生活が前より悪くなったので、積極性など生まれえない。一部の幹部は大衆への見方が現実的でない。上級が要求する任務は確実に果たすのに、大衆から上がる解決すべき問題は解決しなくもよいと思っている<sup>34)</sup>。

56年から57年にかけて、郷里に近い村々に滞在し、57年にはエッセイ「高級社に入ったら、どうやって暮らしていくか」<sup>35)</sup>で、基本的な生産資材は集団所有、労働に応じた報酬という生産関係だが、各戸の収支は各戸に責任があり、自分の頭を働かせて計画を立てなければならないと解説している。

58年1月に郷里で農業社の整風と生産に参加したが、文芸創作大躍進のかけ声に応じて作品を書かねばならず、4月から7月にかけて『靈泉洞』(上巻)を執筆(『曲芸』8-11月に連載)した。その最中に、急遽二日で仕上げたのが『“鍛えろ鍛えろ”』だった。原稿の督促に太原から長治へ向かった韓文洲が往事を綴っている<sup>36)</sup>。

そのころ趙樹理は長治市晋東南地区委員会駐在所の天主教会堂の一室で、『靈泉洞』を書いていた。(中略)「このところ、ずっと靈泉洞に入りこんで出てこれないのだが、『火花』への借りはどうでしょうか。何が何でも、8月号に発表しないとダメですか。」「8月号は組版が始まるところ、誌面をとってあるのですよ。」「編集者としては原稿を取り立てなくてはね。どうしようか。しかたがない、ちょっと靈泉洞から抜け出して、まず借りを返しましょう。」「よかつ



た、ここで待ちます」「いやいや、あなたもお仕事があるでしょう、郵送しますから。」「いえ、ここで待つのが確実です。」「ただ待つのですか。」私は机の上の原稿を見ながら、「霊泉洞からあなたが出てきたら、私がしばらく霊泉洞に入ります。」こうして話がつき、趙樹理が短編小説をこしらえる間に、私は『霊泉洞』初稿を読んだ。(中略)二日後、短編の新作が完成した。原稿を手に取りまずタイトルを見ると、『“鍛えろ鍛えろ”』だった。

整風をテーマにしたのは、当時長治で発行されていた『整風生産通報』の影響だという<sup>37)</sup>。

その後、農村は高級農業合作社から更に人民公社へと編成されていくのだが、趙樹理は10月にアジアアフリカ作家会議参加、11月に朝鮮民主主義人民共和国訪問と海外での活動に忙しく、ようやく59年、郷里で人民公社の工作に入り、「このような状況を文芸作品に反映するのはまだ早いと思います。公社の優越性が発揮されておらず、仕事の中で先進的な、成功した例は見つかっていません。作品は人と事を反映するものですが、どちらも今のところ新しい発見はありません。ですから、もうしばらく、仕事に参加してからにします」と「邵荃麟への手紙」<sup>38)</sup>に記している。この年の3月の座談会で『“鍛えろ鍛えろ”』の執筆意図について語ったことは先述の通りである。

『文芸報』で討論がなされているころ、趙樹理は人民公社の問題点を訴える文章を綴っていた。地方の官僚に訴えても効果なしとみて<sup>39)</sup>、8月に陳伯達宛て書簡をしたため、『紅旗』に投稿したのである。この手稿「人民公社はいかに農業生産を指導すべきかについての私見」<sup>40)</sup>が、折しも彭徳懐の廬山会議での言に重なり、10月に作家協会党組織で趙樹理批判が始まった。しかし、趙樹理はそれまでの発言を曲げず、共同食堂なぞ共産主義のふりだと語り、ついに、11月23日、自己批判することになった<sup>41)</sup>。

18日に党組整風会議の席上で、中央の決議、食糧生産、共同食堂の三件について原則を無視した発言をしたことから、多くの同志から批判を受け、問題の深刻さを認識しました。全党員が中央に服従することは党員として最低限の常識であり、中央が明らかにしていることについて憶測をめぐらし、それを弁明に使うことは、党が許さないことです。他の人がそうしたら私も反対するでしょう。けれども自分の右傾した立場(自分の考えに固執した農民立場)を擁護しそのような発言をしたことは、まことに党歴の長い党員らしからぬことでした。党の規約に照らして、党の厳しい処分を受けます。

右傾した立場を農民立場と言い換え、発言内容が過ちだったとは言わずに服従しなかったことを過ちだったと表現するのは、趙樹理の強靱な精神の現れだろう<sup>42)</sup>。反右傾闘争が尻すぼみになると、62年には大連で開かれた「農村題材短編小説創作座談会」において趙樹理の農村へのリアルな認識が評価され、趙樹理の「名誉回復」がなされた。

文革後の読者は、趙樹理が国家権力の強制的な集団化で収奪され疲弊する農村を明晰に捉えてきたことを前提に、『“鍛えろ鍛えろ”』を読むことになる。

#### 4. 今、どう読むか

文革後の再読における争点は、「足が痛え」や「食い足りない」の言動の裏に餓えて苦しむ農民の姿を読むか否か、若手幹部と農民の關係に国家権力の暴力を読むか否か、読むとしたら、趙樹理がそれを意図したか否かである。

董大中は『趙樹理評伝』<sup>43)</sup>で、小説が趙樹理の農業集団化政策に対する認識と食い違うことから、小説には表層と深層があるとす。高級農業合作社の人々の労働意欲が低いのは普遍的な問題で、その根源は、小説の表層では「足が痛え」たちと主任の王聚海だが、趙樹理の書信や資料では「命令が杓子定規」で「人間扱いしない」幹部、すなわち若手幹部たちである。小説の表層で批判されるのは王聚海であり、若手幹部の楊小四ではない。これは、問題を並べて見せて読者の思想を高める創作手法である。作家の見解は、支部書記王鎮海が若手を批判した「ふざけたやり方」という一言に示されている。作品発表当時、現実の歪曲だと批判した側（つまり武養）は、小説のこの深層を見たのだと、董大中はいう。

この解釈を刺激的に展開したのが陳思和である。『中国当代文学史教程』では作品批評に紙幅をさき、大躍進後の飢餓、さらにその後起きた文革の予兆としての読みを示している。「数年後に起きる文化大革命の中で、大衆闘争会は刑場に等しく、闘争会に参加する大衆一人ひとりが人間性を失い、暴力の言いなりになる共犯者になった。小説のプロットは、幹部が民衆を犯罪の罠に陥れ、それから理性を失った大衆を利用して、後れた農民を懲らしめるよう進展していく。(中略)幹部は横暴で農民をいじめ、農民は消極的サボタージュと私利私欲に走り、農業社は農民の労働意欲を高めるどころか、農民を強制的に従わせることしかできない……趙樹理の主観的な創作意図がそこまで深くはなく農村の現状を示すに止まっていたとしても、芸術の真実が後世の人々に歴史の真実を伝えたのだ。」<sup>44)</sup>

趙勇は、董大中も陳思和も思考枠は武養と同じで、陳思和は、董大中の表層と深層の二分法を、廟堂と民間の潜在創作の二分法に置き換えたと考える。そして、「黨員作家としての趙樹理は自覚的に党の原則で自らを縛っていた」ので、「党の路線、方針、政策と一致しないもの」は書かないと結論を下した。

趙樹理は現実の「問題」を「問題小説」へと転換するとき、できる限り書信のなかの「問題」と「怒り」を消し去り、当時の主流イデオロギーが求め、大方が受け入れられる「平和的言辞」に合わせなければならなかった。だが消しきれなかった。だから、論争になったり深読みをされたりする箇所は、文学と現実の間にある裂け目をしっかりふさぐことができなかつたところなのである。これは趙樹理がわざと残した隙間ではなく、無意識に作ってしまった裂け目なのだ<sup>45)</sup>。

趙勇は山西の農村出身で、そもそも陳思和の読み方に違和感を覚えたのだろうが、彼には力強い助っ人がいた。彼の父は58年に二十歳前後で、ちょうど趙樹理意中の農民読者だったことから、趙勇は父に『“鍛えろ鍛えろ”』を郵送し、争点を伝えて読んでもらったのである。趙勇が「ほぼ農民読者のありのままの感想」を持つという父はこう語ったという。

王聚海という人物は物事を丸く収めようとした。今から見ると、矛盾を激化させないようにという考え方、やり方は理にかなっている。当時の村には確かに「足が痛え」や「食い足りない」といった人がいて、そういう人たちはいいとこ取りの選り好みをするから、ちょっと懲らしめてやるべきだ。楊小四については、若くて血気盛ん、何でも率直に口にして、せっかちだ。農村幹部として、「足が痛え」といった強弁する人には、役場だの裁判所だのを持ち出して脅さないで仕事にならない。「足が痛え」たち村の女には、この方面の知識が無いから、自分のやっていることが法を犯しているのかどうかもわからない。だから楊小四が脅しをかければ、それでひっこむ。農村では、あせれば口汚く罵るのは当たり前、町のようにおしとやかにはいかない。だから、こういうやり方が粗暴などとは言えないし、楊小四も「悪い幹部」などというレベルではない。

趙勇がさらに董大中と陳思和の観点を父に伝えると、

それなら、もしかしたら、趙樹理は本当に思いがあっても書けなくて、しかたがなくぼやかして目くらましにしたのかもしれない。当時は本当に食い足りなかった。あの時分は「三百八十、足りるだろうか、統一購入統一販売いかがかな」といわれていて、そのころ私は会議で、一人年間 380 斤では足りないよと、本当のことを言ってしまった。そのあげく、青年団には残ったが、監督処分になってしまった。ところが上手いこと言うのがいて、「薄くのばして細く切れば、お客さんまでもてなせる」、それで食い足りない問題は解決だ。海千山千のこの人には、おとがめなしだった<sup>46)</sup>。

趙勇は、「足が痛え」が降参したのも理がなく返す言葉がなかったからで、農民の価値判断の基準となる理こそがこのテキストの「民間潜在構造」だという<sup>47)</sup>。この作に弱者の悲しみや権力への批判を読むのは知識人のアングルであり、党员作家としての自覚で自らを律した趙樹理が意図的に政策批判を書き込むことはなかったというのが趙勇の結論である。

趙樹理の直接の意図や当時の農民の受容は趙勇の考察に近いだろう。だが、趙勇も、平々凡々とした日常に暴力の芽が潜むことを、ここから嗅ぎとるなどは言っていない。董大中や陳思和は、その後の歴史を知る者の切実さでもって、この小説に権力と大衆の暴力の予兆を読みとった。その読みが趙樹理文学を中国社会の多様な階層に繋ぎ趙樹理研究熱を再燃させたのである。

以上の争点とは異なる角度から、羅崗はこの小さな小説世界に、現代中国の国家、集団、個人が拮抗する社会構造——労働の計量化と主体性の矛盾、労働管理と村社会の衝突、マスとしての農民権力と村落コミュニティの人間関係の同居——を読み取り、最後に、趙樹理文学と 40 年代の費孝通の仕事から、農村社会改造への意欲という共通項を引き出し、自分たちの未来として、「引き続き資本主義モデルに追随して、ついには事実として二つの世界——ますます富み栄えるモダンで人が続々と流入する都市中国と、貧しく取り残されたまま我先にみなぎ逃げす郷土中国——に分裂した国家」となることを選ぶのかと問うている<sup>48)</sup>。

最後に、現代の村での語りを紹介する。

あまり名誉とは思えないのだが、先述したように、この作のモデルに手を挙げたのが長治の璩寨村である。執筆までの経緯からすれば、小説は生家のある故郷の村にも近く、モデルは一つではな

いだろうが、観光政策上は、どこかが名乗れば他は遠慮するようである。

璩寨村は『人民日報』に載るほどの模範村で、当時は320戸1700人、党の支部が7つあり82人の党員がいた。苟佩芳(1912-65)とその弟が党支部を率い、50年代の数年で天地がひっくり返るほどの変化を村にもたらした。多少なりとも若手幹部楊小四のイメージをもつ人物である。苟佩芳の社会主義への功績は今も讃えられるが、批判もあった。人々は陰で「二匹の犬(苟と同音)がいなければ、璩寨は社会主義へと歩めない」と揶揄したという<sup>49)</sup>。

苟佩芳は50年から村の支部書記になり、戯れ歌を作るのがうまく、山西日報の模範通信員として原稿料も稼いでいた。趙樹理は、村に来ると耳にした大衆の言葉をノートにとる程度で、苟佩芳が「作家なのに、書いているところは滅多に見ない」と言うと、「そんなに簡単にはいかない。しっかり考えもせずに書けるものか」と答えたという。55年胡風事件が起きると、苟佩芳は「国には胡風がいたが、璩寨に胡風はいないか」と言い出し、彼に反対する幹部は胡風分子にされそうになった。ほら吹き時代の58年、苟佩芳は水を得た魚になり、大躍進進軍会での態度表明では、「わが五星社は千を万に、紅い功績を中央へ送ろう」と詠った。増産のための仕事はしたが、次第に横暴になり、労働時間が減るからと、道端に集って飯を食うことまでやめさせたので、村人は例の「二匹の犬」の陰口をたたいた。傍若無人で上級にも憎まれ、ついに上級の策略にかかり、62年「破壊軍婚罪」で服役し、出所後病死した<sup>50)</sup>。

今の村人は、趙樹理の小説の内容は知らない。村人に趙樹理といえ、水路開削に取り組んだ記憶が蘇る。50年代初め初級農業合作社設立のころ、趙樹理は「腹がふくれなくては、誰も社には入らない。用水路を引いて増産できたら、農業社が優れているとわかって、みんな社に入りたくなるだろう」と、村の地形を見て回った。また、これはよいと思った人のことを歌にして壁に貼りだし褒めていた<sup>51)</sup>。

『“鍛えろ鍛えろ”』は、今の村の読者に餓えの記憶を呼び覚ます。年間420斤という数字や食糧の統一買付以降「食い足りない」が口癖になったという小説の叙述は、当時、趙樹理が受容者に想定していた農民にとって常識だったが、時がたてば、あれは異常な時代だったとわかる。「50年代、統一買付統一販売が実行されたころ、数えて20歳、高級社で監察主任をしていた。一人あたりの食糧は年360斤から420斤だ。細かく計算して節約に励み、保存食、瓜、野菜を混ぜれば、たいていは飢えをしのげたが、独り者や大食いには足りない。食い足りないのは、当時は一部ではなく、璩寨も例外ではなかった。夫が働きに行った隙にこっそり食っていた嫁さんもいただろう。他の村にもいたに違いない。」<sup>52)</sup>

## 小結

趙樹理の小説から農民が自分の体験を語り始める。時空を異にする読み手が作品に重層的な意味を与えていく。現代中国の特別な文学制度が、ほんの数日間を描いた短編の背後にあったかもしれない人と事を文字にして、作品の時空を広げていく。受容者が造りあげる広がりの中に趙樹理文学はある。

最後に、今の読者の一人として論者の解釈を記しておきたい。

「食い足りない」は満たされない腹と思<sup>53)</sup>を抱える。「足が痛え」の達者な口もお上の威光にはかなわない。若手幹部は上位に立って困り者をやりこめ、主任の気配りは空回り、支部書記は論評するばかりだ。餓えをしのぐのが精一杯の食糧配給、女性には勘定が合わないノルマと労働点数、村と郷との上下関係など、その後の中国農村の歴史を知る者には、言葉の端から透けて見える農業社の危うさが、読後に重苦しさを残す。『小二黒結婚』でも『三里湾』でも、登場人物に徹底的な自己変革を迫らない趙樹理の世界は、善悪是非とは別に、長所短所を合わせもつ人間が、そのままで暮らしていける共同体だった。だが、この村にはそういう安心感に影が射している。村を変えるには、大きな問題、羅崗が指摘する国家、集団、個人が拮抗する社会構造に踏み込まなければならなくなるだろう。二日間で仕上げた小説にも、そんな大きな問題が透けて見える。配給量の数値、統一買付以降の「食い足りない」状況、捨て去るべき「過渡期」の名を冠した「食い足りない」の夫、そして大会の描写など、董大中のいう深層を覗かせる描写は、芸術の真実の力と抽象化するにはそぐわない意図的な書き方であり、趙勇が言うように無意識に書いてしまったとは考えられない。『“鍛えろ鍛えろ”』では、社会構造に食いこむ意図はなかったが、当時の農民にとっては日常の、だが距離をとってみれば不穏な事態を書き入れ、この村をとりまく大状況を示したのではないか。それなしでは、丸く収めてきた村長のやり方が通じなくなったことの説明がつかない。小説世界の社会状況と連動してストーリーを展開させる趙樹理の手法を芸術の真実の力というならば、董大中の評価にも納得がいく。先が見えないこの時期、趙樹理が霊泉洞に入りこみ、農民だけで運営する共同体を夢想してみたのも頷ける。

80年代、公開された趙樹理の書信を初めて見たとき、彼の小説との落差の理由は、黨員としての自覚だろうと推察した。そういう自覚に共感するのは、難しい。けれども、『“鍛えろ鍛えろ”』を広い時空に置いて見かえた今、それとは異なる理由があったのではないかと思う。国家の政策を変える力は、農民にも農村の基層幹部にもなく、中央にしかない。ならば、農民に向けた小説にそれを書く意味はない。残酷なほど厳しいリアルな認識が趙樹理にはあったのではないか。

## 注

- 1) 洪子誠『中国当代文学史』北京大学出版社、2010年、17頁注①。
- 2) 宇野木洋『克服・拮抗・模索 文革後中国の文学理論領域』世界思想社、2006年、10頁。
- 3) 洲之内徹「趙樹理の世界」・竹内好「趙樹理文学の新しさ」、『文学』1953年9月号、871-888頁。
- 4) 釜屋修『中国の栄光と悲惨 評伝趙樹理』玉川大学出版部、1979年。
- 5) 陳徒手『人有病 天知否——一九四九年後中国文壇記実』人民文学出版社、2000年。
- 6) 陳徒手「一九五九年冬天的趙樹理」、『読書』1998年第4期。
- 7) 陳思和主編『中国当代文学史教程』復旦大学出版社、1999年、40-48頁。
- 8) 拙文「趙樹理生誕110周年記念活動に参加して」、『日本中国当代文学研究会会報』2016年第30号、91-92頁参照。
- 9) 1949年に趙樹理が初代社長となり、畏友の王春が副社長を務めたことから、趙樹理の未公開資料を保存していたと推察される。
- 10) 1934年発表、1930年代の文芸大衆化論争にかかわる評論である。
- 11) 北岳文芸出版社、1986年第一版、2000年第二版。
- 12) 大衆文芸出版社、2006年。
- 13) 北岳文芸出版社、2018年。
- 14) 董大中『趙樹理年譜』山西人民出版社、1982年。『趙樹理年譜 増訂本』北岳文芸出版社、1993年。
- 15) 黄修己『不平坦的路』、天津教育出版社、1990年。

- 16) 朱凌『趙樹理闡釈史 趙樹理創作価値変遷与時代文化思潮之關係』山東大学出版社、2015年。
- 17) 段文昌『趙樹理小説的改編与伝播』山西人民出版社、2014年。
- 18) 山西人民出版社1958年10月、初版第一刷30万部、地元山西の画家張懷信が挿絵を担当している。
- 19) 大阪外語大学内新中国文学研究会『新中国文学』第5号、1960年3月、21-57頁。
- 20) この冊子には会話文であることを示す“ ”がない。以下、本稿で引く文献の“ ”の有無はそれぞれ原載の通りとする。
- 21) 唐弢「人物描写上の焦点—読了趙樹理同志『鍛錬鍛錬』」、『人民文学』1959年8月号。
- 22) 張慶和「読小説『鍛錬鍛錬』」、『文芸報』1959年第7期、2-3頁。
- 23) 武養「一篇歪曲現實の小説—『鍛錬鍛錬』読後感」、『文芸報』1959年第7期、4-5頁。
- 24) 黄修己『不平坦的路』、天津教育出版社、1990年、57頁。
- 25) 楊匡漢、楊早編、中国社会科学院文学研究所当代室著『1949-2009 六十年与六十部 共和国文学案』、三聯書店、2009年、107頁。
- 26) 安楊「這是什麼工作方法?」、『文芸報』1959年第9期、11頁。
- 27) 趙樹理「当前創作中的幾個問題」、初出は『火花』1959年6月号。『趙樹理全集』第4卷、北岳文芸出版社、2018年、436頁から引用。
- 28) 黄修己『不平坦的路』、天津教育出版社、1990年、65頁。
- 29) 洪子誠『中国当代文学史』北京大学出版社、2010年、110頁。訳出に当たって、岩佐昌暲等訳『中国当代文学史』（東方書店、2013年）を参照した。
- 30) 周立波はこの毛沢東の言葉について、『山郷巨変』の中で「纏足した女性も人ではないか」と言わせている。陳思和は『中国当代文学史教程』でこのセリフを引いており、後述する陳の「足が痛え」の解釈は、周立波の表現とも重なる。なお、『山郷巨変』改訂版では削除されている。拙文「周立波『山郷巨変』再読」（『日本中国当代文学研究会会報』第24号2010年88-89頁）参照。
- 31) 拙文「『三里湾』評価をめぐる問題」、『お茶の水女子大学中国文学会報』第四号、1985年、97-114頁。
- 32) 趙樹理「致中国作家協会」、『趙樹理全集』第5卷、北岳文芸出版社、2018年、275頁。
- 33) 注31参照。
- 34) 趙樹理「給長治地委XX的信」、『趙樹理全集』第5卷、北岳文芸出版社、2018年、289-291頁。
- 35) 趙樹理「進入高級社日子怎麼過」、『趙樹理全集』第5卷、北岳文芸出版社、2018年、296-298頁。
- 36) 董大中『趙樹理年譜 增訂本』北岳文芸出版社、1993年、497頁。
- 37) 楊宏偉「整風運動對『鍛錬鍛錬』的影響」、馬補仁、楊偉兵主編『趙樹理在濠寨』、趙樹理研究叢書之十三、207頁。出版社及び出版年の記載なし。
- 38) 趙樹理「致邵荃麟」、『趙樹理全集』第5卷、北岳文芸出版社、2018年、339-340頁。
- 39) 蔡翔『革命/叙述 中国社会主义文学—文化想象（1949-1966）』北京大学出版社、2010年、253頁。蔡翔は、趙樹理のこの時期の考え方が梁漱溟晩年の思考に非常に近いとも指摘する。
- 40) 趙樹理「公社應該如何領導農業生產之我見」、『趙樹理全集』第5卷、北岳文芸出版社、2018年、355-360頁。
- 41) 趙樹理「荃麟同志并転党組」、陳徒手『人有病 天知否—一九四九年後中国文壇記実』人民文学出版社、2000年、162頁。
- 42) 拙文「権威の相対化と文学の自律性：『洪子誠“大連会議”材料的注釈』から考える」、『日本中国当代文学研究会会報』第27号、2013年、75-85頁。
- 43) 董大中『趙樹理評伝』百花文芸出版社、1986年第一版、1990年第一次印刷、295頁。
- 44) 陳思和主編『中国当代文学史教程』復旦大学出版社、1999年、第47頁。
- 45) 趙勇『趙樹理的幽霊—在公共性、文学性与在地性之間』中国人民大学出版社、2018年、114頁。
- 46) 同上、15-16頁。
- 47) 同上、111頁。
- 48) 羅崗「“文学式結構”与“倫理性法律”—重読『“鍛錬鍛錬”』兼及“趙樹理難題”」、『文学評論』2014年第1期、182-193頁。この論文は、削除された部分と原題がネット上で公開されている。羅崗「“文学式結

構”与“倫理性法律”一重読『“鍛錬鍛錬”』兼及“農業社会主義”」<https://mp.weixin.qq.com/s/qFfnwg37so0fLBzgjZwvvA>

- 49) 許惠義「『鍛錬鍛錬』与璩寨村—趙樹理短篇小说『鍛錬鍛錬』創作素材初探」、『趙樹理研究』2012年第1期、27-36頁。
- 50) 李文保「趙樹理与苟佩芳」、馬補仁、楊偉兵主編『趙樹理在璩寨』、趙樹理研究叢書之十三、103-128頁。出版社及び出版年の記載なし。
- 51) 趙巾又「璩寨三題」馬補仁、楊偉兵主編『趙樹理在璩寨』、趙樹理研究叢書之十三、175頁。出版社及び出版年の記載なし。
- 52) 同上、181頁。
- 53) 黄修己（注23参照、192～196頁）が「売買結婚（ここでは自由結婚の設定ではあるが：引用者注）では、多少なりとも才色のある女性は、自分の価値がわかっており、貧しい婚家に不満を持つ」というように、「食い足りない」にはこの女性の自分の境遇への思いも込められていると考える。

(和光大学教授)